旧家の選択　〜新しいライフスタイルへの調和〜

住まいは文化
House is Culture
no.25

Moriwaki_House

森脇邸

兵庫県宝塚市

宝塚市北部、玉瀬の旧家・森脇邸は、江戸末期に建てられた茅葺き屋根の民家でしたが、2003年に3年余にわたる改築工事が竣工。「明るい洋間に家族が集う」新しいライフスタイルを大胆に取り入れた家へ生まれ変わりました。愛着のある民家のたたずまいは継承しながら、快適な暮らしの場とするために建物と積極的に向き合い、これから先も長く住み続けられる家にリフォームされました。

リビングからダイニングを見る。長大な松の梁は洗いをかけて再利用し、あらわしとした。右のはしごから屋根裏のロフトへ

茅葺き屋根に象徴される民家の多くは、かつての家父長制や田舎の生活様式を背景とした間取りになっています。森脇邸の母屋も同様で、明治期・大正期に改修されたものの、依然として、日当たりの良い南側に客間（座敷）を配し、生活の場である居間や台所は暗い北側に集められていました。家族は昼も電気を点けて過ごしていたといいます。

「7代目当主の森脇さんは、家は夫人をはじめ、家族が生活しやすいものであるべきとの考えです」と話されるのは改築を担当した建築家・澤良雄さん。この考えに沿って、南西角にあった客間を板張りのリビングに変更。隣室も客間から連続する板張りとし、テーブルセットを置く洋式のダイニングに改築しました。また、南側屋外にはウッドデッキも新設。こうして、普段の生活に明るい日差しを取り込みました。

そして、台所は北西角から母屋の中央へ。これにより主婦の動線は整理され、各部屋への移動が効率的になりました。昔は考えられなかった配置ですが、換気設備など現代の機材が可能にしたのです。

茅葺き屋根は、将来、材料や職人の手配が難しくなるであろうことを考慮し、スレート葺きに変更。従来と同じ勾配にしてシルエットを再現する一方、フランス製天然スレートの存在感が新たな魅力になっています。屋根材の変更によって加重が増え、補強は必要でしたが、屋根裏はほこりから解放されてロフトとして活用できるようになりました。台所はロフトへ吹き抜け、明かり取りを設けた屋根裏が仰ぎ見られます。これも、かつてのたたずまいを感じさせる風景です。

里山に抱かれた地で100年以上にわたって受け継がれた民家。当主は、この環境と建物の良さを評価し、将来も住み続けることを選択されました。新しい住みやすさを加えた民家は次世代へ、さらに先の100年へ引き継がれていくことでしょう。

改築前の森脇邸（写真提供アトリエサワ）

改築後の森脇邸。屋根材は天然スレートに。茅葺きの厚みに似せるため、軒先付近に約3倍のスレートを重ねた。かすかにむくりをつけ、柔らかなシルエットも再現

ロフトとなった屋根裏。叉首組は残したが、新しい屋根材による加重に耐えるように渋柿を塗った新材で母屋・垂木を補強

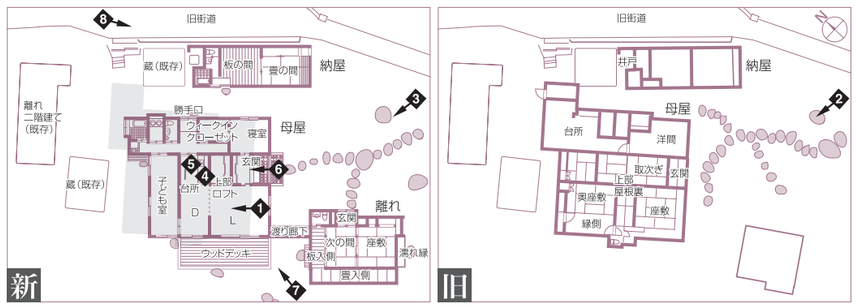
台所上部の吹き抜け

玄関の天井には屋根裏に使われていた燻し竹を再利用。その上に漆喰土を置いた

開放的なウッドデッキをリビングとダイニングの南側に設置

南側は開放的に計画した反面、北側の旧街道に沿った納屋は視線を遮へい

【母屋】北西角の増築部分を撤去し、納屋と平行に曳家。納屋との間を風が通るようになった
【納屋】旧街道に接し、地域の歴史的風景になっていることを念頭に改築
【離れ】新築し、母屋と渡り廊下で繋ぐ。母屋を全て洋室にしたため、田舎の暮らしに欠かせない座敷を作り、畳敷きの入側を回した



家族構成■夫婦、子ども3人
設　　計■澤 良雄／アトリエサワ
施　　工■棟梁：岡本義男
改築竣工■2003年5月